

吉蔵における二種菩薩論

——直往菩薩と廻小入大菩薩——

菅 野 博 史

仏の經教が本来、対機の教化を目的とするものである以上、教判思想の構成契機には、經教の思想的内容の分析ばかりでなく、対機そのものの考察も含まれるはずである。吉蔵は『浄名玄論』巻第七において、声聞、縁覺、菩薩の三種の対機について、包括的で図式的な分類を試みているが、その中で、菩薩を直往菩薩と廻小入大菩薩の二種に分けている。廻小入大菩薩とは、小乗から大乘に転入して、声聞から菩薩となったものを意味し、かつ、一切衆生の成仏を実現させるためには、声聞が菩薩に転換しなければならないのであるから、対機の問題は、突きつめると、直往菩薩と廻小入大菩薩に二分される菩薩論に帰着するのである。そこで、本稿は、この二菩薩の概念の形成過程、思想的意義を明らかにすることを目標とする。

まず、この二菩薩の概念が法華經と密接な関係をもつことは、『中觀論疏』巻第一末に明示されている。そこで、吉蔵

の法華諸疏を参照すると、『法華遊意』の來意門第一条が、二菩薩についてもっとも総合的な議論を展開しているが、二菩薩の概念の形成過程を考察するためには、『法華玄論』と『法華遊意』における法華經と華嚴經との比較に注目しなければならぬ。前者は、二經の相違点を十四条列挙するが、その第三条には、「華嚴は発始より大を学ぶ緣の為に説き、法華は二種の緣の為に説く。一には前小後大の緣の為に説き、二には発始より大を学ぶ緣の為に説くなり」とあり、第四条には、「華嚴は福德大利根人の為に説き、法華は薄福鈍根人の為に説く。初本に大を学び、中途に大を棄てて小に留まり、後に還た小を捨てて大に従ふが故に鈍根と名づくるなり」とある。『法華遊意』では、二經の相違を五点に整理し、その第二「徒衆の異」において、「花嚴は直往の菩薩の為に説き、法花は廻小入大の人の為に説く」とある。両者を対照させれば、『法華玄論』の「発始学大緣」

が直往菩薩であり、「前小後大縁」が廻小入大菩薩であることは明らかであろう。これを要するに、吉蔵は、『法華玄論』においては、法華經と華嚴經の對機の相違について明確な認識を持ってはいたが、まだ二菩薩の名称を確立しておらず、『法華遊意』撰述のときには、すでにその名称を確立していたのである。

そこで次に、二著の中間に撰述されたと推定される『法華義疏』を参照しよう。^⑨その用例を検討すると、この二菩薩の概念は、『法華玄論』における法華經と華嚴經との對機の相違を明確にしようとする問題関心を継承しながら形成されたことが判明する。たとえば、卷第十二に、「直往の菩薩の爲めに説いて仏慧に入らしむるが故に華嚴と名づけ、廻小入大の菩薩の爲めに説いて仏慧に入らしむるが故に法華と名づく。人に約して利鈍の不同有り、時に就いて初後異と爲すが故に兩教の名字別なるのみ。平等大慧、清淨一道を論ずるに至っては、更に異有ること無し」とある。これは、二經の価値の平等性を論証するための方法として、その對機を考察したものである。

また、このことは、二菩薩の依文として、しばしば引用される從地涌出品の文、^⑩「此諸衆生、始見我身、聞我所説、即皆信受、入如来慧。除先修習学小乘者。如是之人、我今亦令得聞是經、入於仏慧。」が、直接には、華嚴經と法華經の比

較を意味するものとして解釈される事実からも証明されるであろう。たとえば、卷第十に、「^⑪初めには、直往の菩薩は化度すべきこと易しと明かす。始見我身聞我所説とは、即ち華嚴の会なり。諸の菩薩等、華嚴を説くを聞いて、即ち仏慧に入る。除前修習学小乗者とは、廻小入大の人は大機未だ熟さずして、華嚴の会より靈山に竟る前までは、未だ頭には大乘を教ふことを得ざれば、之れを簡除すと明かすなり。如是之人の下は、第二に廻小入大の菩薩は、大機已に熟して、今化するに之れを得るが故に度し易しと名づけ、亦た入於仏慧と称することを明かす。故に法華は即ち是れ華嚴なりと知る。応に華嚴は理深く、法華は義浅しと謂ふべからず」とある。

このように、二菩薩は、基本的には、法華經と華嚴經との對機の相違を明示するものであるが、^⑫「頓教は直往の菩薩を化し、漸教は通じて二種の菩薩を化す。…中略…初めの華嚴の教門は、此れ直往の菩薩を教へて仏乘に入らしむ。華嚴より以後は、此の品の始終の意に依るに、凡そ四教有りて、廻小入大の人を調伏して、方に仏慧に入ることを得しむ」と述べられるように、華嚴經とそれ以外の大乗經との對機の相違にまで敷衍されるのである。もっとも、華嚴經以後の諸大乘經^⑬の中では、法華經が廻小入大菩薩を中心とするのに対し、般若經の對機は中心的には直往菩薩とされるように重点の相

違があるが、他方、引用文にあるように、四教⁽¹⁶⁾（四調柔）によって二乗の機根を調柔する側面をみれば、般若經も密かに廻小入大菩薩をも教化することがわかる。

さて、吉藏のこのような二菩薩の思想は淨影寺慧遠の影響を受けたという指摘がある⁽¹⁷⁾。たとえば、『大般涅槃經義記』卷第一之上には、「菩薩藏の中に教ふる所の人に亦た二種有り。一には漸、二には頓なり。漸入と言ふは、是れ人過去に會て大法を習ひ、中間に小を学び、後に還た大に入る。大は小より入れば、之れを謂ひて漸と為す。故に經に説いて言く、先より修習して小乗を学ぶ者を除く。我れ、今亦た是の法の中に入らしむ。此れは是れ漸入なり。頓悟と言ふは、諸の衆生有りて久しく大乘を習ひ、相應する善根もて、今始めて仏を見れば、則ち能く大に入る。大は小に由らざれば、之れを目づけて頓と為す。故に經に説いて言く、或は衆生有りて、世世より已來た常に我が化を受く。始め我が身を見、我が所説を聞けば、則ち皆な信受して如来の慧に入る。此れは是れ頓悟なり」とある。この慧遠の叙述ともっともよく類似した吉藏の文章は、『勝鬘宝窟』卷上本にみられるが、必ずしも、『勝鬘經義記』から影響を受けたとは断定できない⁽¹⁸⁾。慧遠の叙述の中には、頓悟の人と漸入の人という着想、および、その依文としての涌出品の文の指摘など、吉藏の二菩薩の先蹤たる地位を十分に示しているといえよう。ただし、当

該の涌出品の文にまったく関心を示さない（したがって、まだ慧遠の影響を受けていないと推定される）『法華玄論』においても、前述したように、法華經と華嚴經との対機の相違に注意を払っていたことから、吉藏自身にも、二菩薩の概念形成に向かう基盤が早くから内在されていたと推定される。

以上のように、二菩薩の名称の確立には、吉藏自身の問題意識、慧遠の影響が必要であつたと推定されるが、それに加えて、『大智度論』の影響が決定的に重要である。なぜなら、直往菩薩とは、吉藏自身の造語ではなく、『大智度論』卷第九十三に説かれてゐる用語であるからである⁽¹⁹⁾。このことは、吉藏自身も、『法華義疏』卷第五において、「釈論に云く、羅漢は淨土に生まるるも、根鈍にして、仏道に於て迂廻稽留すれば、直往の菩薩に如かず」と述べてゐる。これによれば、直往菩薩とは、仏道において遠まわりをする阿羅漢とは異なり、直ちに淨土に行き、疾く仏道を成ずる菩薩であり、「直往」も阿羅漢と対比的な菩薩に対する一般の規定にほかならない。この菩薩に対して、阿羅漢は遠まわりするといわれているが、具体的には、小乗を經由して大乘に至る点を指しているのであろう。そして、『法華經』の藥草喻品で、「諸声聞衆、皆非減度。汝等所行、是菩薩道。漸漸修学、悉当成仏。」などといわれる法華經の根本思想に基づきながら、直往菩薩に相對して、廻小入大菩薩という術語が形成されたと推定さ

吉蔵における二種菩薩論(菅野)

れる。

これを要するに、吉蔵における二菩薩は、法華經と華嚴經との對機の相違を明確にするという問題意識を中心に、慧遠や『大智度論』の影響を受けながら形成されたものであり、その思想的意義は、法華經の二乗作仏の思想に準拠して、声聞を廻小入大菩薩と捉えかえすことによって、声聞に対する教化の目的(二乗作仏)と過程を明確化したことに求められであろう。

- 1 大正三八・九〇一上—中参照。
- 2 廻小入大菩薩とは、声聞が法華經にいたって、菩薩の十信の初心の位に入つたものをいう。『法華義疏』卷第七、「問、声聞廻小入大、得入十信位者、為入十信初心、為十信滿足耶。答、但入十信初心。」(大正三四・五四三中)を参照。
- 3 『法華義疏』卷第四、「問、如来初発心時、願一切成仏。今並未成仏、云何称願已滿耶。答、靈山一会、廻小入大菩薩、同入一乘。自爾已前、令直往菩薩、授記作仏。一期出世、唯此二人、並令作仏、則是「一期圓滿。」(大正三四・五〇二下)を参照。また、富沢慶栄「吉蔵の声聞成仏考」(『天台学報』第十九号、昭和五十二年十一月)参照。
- 4 「望法華經意者、有二種菩薩。一直往菩薩、二廻小入大之人。」(大正四二・一七上)を参照。
- 5 大正三四・六三三下—六三四上参照。
- 6 大正三四・三六六中。
- 7 前同。
- 8 大正三四・六三五上。
- 9 『法華義疏』では、二菩薩について十数箇所の言及があり、さらに、『法華統略』では、およそ三十箇所の言及がある。このことは、『中觀論疏』の指摘の正しさを裏つけるものである(註4参照)。

- 121110 大正三四・六三一中。
大正九・四〇中。
大正三四・六〇〇下—六〇一上。同様の例は、『法華義疏』卷第四(五〇一上—中、五〇二下)、卷第十(六〇八上)等にある。
- 1413 大正三四・五五二中—下。
勝鬘經の對機は、華嚴經と同様、直往菩薩とされる(『勝鬘寶窟』卷上本、大正三七・五上参照)。
- 15 『法華遊意』、「波若教、明直往菩薩作仏。法花教、明廻小入大菩薩作仏。」(大正三四・六四六中)、『法華統略』卷第一、「波若正教直往菩薩、法華正教廻小之人。」(統藏一—四三一—四右下)等を参照。
- 16 拙論「吉蔵における(四調柔)について」(『印仏研』二十九—一、昭和五十五年十二月)参照。
- 17 顯密四門の第三門、「顯教菩薩、密化声聞。」(大正三四・六四五上)は、般若經、諸方等經に配されるが、この「菩薩」が直往菩薩であり、「声聞」が廻小入大菩薩である。拙論「吉蔵の經典觀」(『印仏研』三十一、昭和五十六年十二月)参照。
- 18 村中祐生「嘉祥大師『二藏』義の成立考」(『南都仏教』第二十二号、昭和四十四年一月)参照。
大正三七・六一三上。
- 2019 「為直往人説、亦得名之為頓。以不從小入於大故。為廻小人説、目之為漸。以其從小入於大故。此之頓漸、如法華説。…後略。」(大正三七・六上)参照。
- 21 慧遠の頓漸思想は、註19以外にも、ほとんど同文が、『勝鬘經義記』卷上(統藏一—三〇—四、二七六右下)、『無量壽經義疏』上卷(大正三七・九一上)、『維摩義記』卷第一本(大正三八・四二一中)にみられるからである。
村中氏の前掲論文にも指摘されている。
「得阿羅漢証時、不求諸菩薩深三昧。又不広化衆生。是則迂廻於仏道稽留。…中略：是人著小乘因縁、捨衆生捨仏道。又復虚言得道、以是因縁故、雖不受生死苦惱、於菩薩根鈍、不能疾成仏道、不如直往菩薩。」(大正二五・七一四上)参照。
- 2524 大正三四・五一六中。
大正九・二〇中。